

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	多摩センターこどもの家
施設所在地	摩市落合1-47ニューシティ多摩センタービル2
法人名	(株) ライフケアサービス

1. 活動のテーマ

<テーマ>

サッカー教室

<テーマの設定理由>

同じビル内にサッカーコートがあり、そこを練習拠点としているフットサルチームに、子どもたちにサッカーというスポーツを通して体を動かす遊びを行ってもらえるか打診したところ、快く引き受けてもらった。全天候型のコートが園のすぐ近くにあるという環境の強みを生かして実現した。今では性別を問わず人気があり、学校では体育の授業でも行われるサッカーというスポーツに、幼少期から慣れ親しみ興味を持てるようにすることを目的としている。また、子どもたちがサッカーの基本的ルールを知ること、日々の保育でもサッカーという遊びを取り入れて、全身運動を楽しく行うことができると、体力向上や気持ちの開放につながり、より良い環境で子どもたちに日々の生活に彩を与えることができると考えた。

2. 活動スケジュール

2歳児クラスのみ月に1回、同ビル8Fフットサルコートにて実施

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

サッカーを教えてくれるコーチの手配、サッカーコートのレンタル手配は園で行う。教室の中で必要な道具、設備はコーチ側で用意をしてくれる。保護者への案内のチラシ作り、年間スケジュールの周知、水筒の用意のお願いをする。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

指導内容はコーチに一任している。初回から、サッカーというスポーツは基本的に手を使わないという事を子どもたちに伝え、ボールを蹴ったり、転がってくるボールを足で止めるといった動作を繰り返し行うことで、子どもたちも理解をしていった。ボール以外にも、ランニングやストレッチもレッスンに取り入れ、水分補給以外では常に動き続けている。また、「シュート」という動作はサッカーゴールに向かってボールを蹴る動作であるという事が数回のレッスンで身に付いた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

いつものボール遊びとは違う活動が始まり、戸惑う様子の中、回を重ねながら子どもたちの自主的な活動を保育者は意識した。参加に消極的な児やコーチの指示通りの動きができない児には、保育者が付いて前向きになれるよう声を掛けた。足でボールを扱うことに慣れてくると、保育者の手を借りなくてもボールの上に片足を乗せてバランスを取ったり、足の裏でボールを転がせるようになったり、足だけでドリブルをして最後はサッカーゴールにシュートするまでになった。初めは弱々しかったシュートも次第に力強くなり、ゴールまで早くボールを運べた児は、まだ終わらない他児に「がんばれ！」と声を掛ける姿もみられるようになった。コーチの「お手本できる人？」の問い掛けに、みな積極的に手を挙げてみなの前で動きを披露し、それを見たともだちが自ら拍手するようになり、子どもたちの成長を短期間で感じることができた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

サッカー教室が始まった頃は、自分たちで好きなようにボール遊びを始めてしまう事が多かったため、保育者は、子どもたちがコーチの話を聞くように声を掛けたり、不安で参加したがる児には強要することなく、自主的に活動に参加できるよう働きかけた。コーチも鬼ごっこや電車ごっこなどの遊びを取り入れながら、子どもたちと距離を縮め信頼関係を気付くよう工夫してくれていた。また、サッカーの基本である、ボールを手ではなく足だけで扱うことや、ゴールに向かってシュートをするなどのルールを子どもたちにわかりやすく教えてくれたので、普段接している保育者ではない先生から、教わることも成長の促進に必要な事なのだと感じた。回を重ねるごとに細かい足の動きができるようになり、コーチの話を理解するようになった姿を見て、集中力や器用さも身に付き、身体の体幹もしっかりしてきたように感じた。

苦手意識で参加したがる動きも、保育者が寄り添って一緒にやってみることで自然とできるようになり、それが自信へとつながり笑顔を引き出すことができると、保育者やコーチの自信にもつながっていくので、子どもたちが楽しく意欲的に参加できるようしっかりとサポートしていきたい。